平成“最後”の新成人 スペシャルインタビュー

成人式実行委員長
田口 裕斗(ゆうと) さん

可児生まれ、可児育ち。現在は京都で勉学に励む大学生。「人生最高の晴れ舞台を、自分の手でつくりあげたい」と前の年からサポーターとして実行委員会に。仲間からの推薦もあって、今年実行委員長という大役を務めました。

可児で過ごした一番の思い出は？

学校生活が楽しかったです。たくさんの良き先生方にも恵まれましたし、何より面白い仲間と出会うことが出来ました。

可児のイメージは？

バラのまちですね。僕が生まれる少し前に花フェスタ記念公園が出来たり、「ばらのまち可児へようこそ」という看板が出ていたのが印象的です。

若い世代（働く・子育てをする）が住みたいまちとは？

若者に優しいまちですね。住みやすいと感じた土地で永住したいと思います。子育て施設や緑豊かな公園など子どもたちが遊べる場所があるのも大きなポイントですね。そういった場所で「人」と「人」が関わり、つながればと思っています。

新しい時代にむけての抱負を！

全国的に人口減少が進み、この可児市も高齢化が進んでいます。その課題への方策をみんなで考え、実行する。そんな市民対話の場ができればと思っています。「まちづくり」が盛んな地域では、市民間の「対話」が進んでいます。それが可児市でも今以上にできれば、可児市に住みたい、移住したいと感じる人が増えるのではないでしょうか。

成人式の誓いの言葉で述べた「一人の市民として日々成長していく」を実現するためには、どのような資質・能力が必要で、どのように育むかを考えなくてはいけません。私は現在、大学で「市民（シティズン）」に関して学んでいます。その中で何が出来るのかをこれから研究していきたいと思っています。

成人式実行委員
阪野(ばんの) 珠(ころな) さん

可児生まれ、可児育ち、現在も可児から通う大学生。「成人式で振袖を着た自分が、舞台でビシっと進行を務めている姿を想像して、すごくかっこいいな…！」と憧れ実行委員に。もちろん当日は、ビシっとかっこよく進行していました。

可児で過ごした一番の思い出は？

中学時代の生徒会活動が一番大変だった、けれど自分を成長させてくれました。人をやる気にさせるためにはどう声を掛けるか、どんな態度で向き合うか、常に考えさせられました。そして、相手の都合や気持ちに寄り添った接し方を心掛けることが大切だと気付くことができました。この経験は、大人になって人の意見をまとめたりする機会が増えた今、私を助けてくれています。

可児のイメージは？

「温かいふれあいにあふれたまち」です。可児市は交通の便も決して良くないですし、大型ショッピングモールやアミューズメントパークがあるわけでもありません。だからこそ、どこへ行くにも誰かと乗り合わせたり、何もない無人駅で居合わせた人と仲良くなったり、月に1度小さなカフェに集まって近況を語り合ったり、お店の人とお客さんが仲良くなったり人との密接なふれあいがたくさんある、温かいまちなのではないかと思います。何もないからこそ、そばにいる人とのコミュニケーションが生まれやすいこの可児市が大好きです。

若い世代（働く・子育てをする）が住みたいまちとは？

子育ては住む人にとって一番大切なポイントだと思うので、親子が安全にのびのびと遊べる公園や広場がもっと増えると良いなと思います。

新しい時代にむけての抱負を！

「自立」することです。これまでは実家暮らしという環境に甘えて、親に身の回りのことを任せてしまうことが多かったですが、成人を迎え、新しい時代が始まる今、心機一転して何事も自分の力で乗り越え、助けられる側から助ける側へ変わっていきたいです。

平成31年1月13日に行われた、平成最後の成人式。実行委員のみんなで考えたテーマは“襷(たすき)”。平成最後の新成人として今一度自分たちの気持ちを引き締め、これまでの想い、これからの夢や希望を、次の舞台、次の世界へつないでいきたいと願いを込めました。
新しい時代を「つくる」のは若き世代がもつ発想と活力。「支える」のは諸先輩の知恵。そして「生きる」のは全ての世代です。平成の次の時代はどんな景色をわたしたちに見せてくれるのでしょうか。

平成 PICKUP 自然災害の恐ろしさを痛感

平成６年夏は全国的に異常渇水となりました。可児市では小中学校のプールが中止になるなど生活に支障を来しました。近年ないほどに水位が下がった木曽川では偶然にも化石林が発見されました。

平成22年の7・15災害では、土田地区などで大規模な浸水がありました。１人が亡くなり、２人が行方不明、トラックが十数台流されるなど、大きな被害をもたらしました。この頃から、局地的豪雨などの頻度が増し、自然の脅威が変化しつつあります。

①川底から出現した世界最大級で約 1,850 万年前の化石林
② 7･15 災害で浸水した土田地区（国際航業提供）
③平成 23 年 9 月 20 日の豪雨で明智駅周辺が浸水

ちょっと？だいぶ？ 懐かしい可児の街並み

①広見（昭和60年頃）
②市役所周辺（平成元年）
③整備中の広見土田線（平成４年）
④開発前の瀬田の風景（平成４年）

ちょこっと豆知識 可児と長崎を結ぶもの

4月14日（日）に開催されるサッカーＪ２・ＦＣ岐阜の可児市ホームタウンデーの対戦相手となる長崎。その長崎と可児には、意外なつながりがあります。

江戸時代、美濃国可児郡土田村（現在の可児市土田）では、吹きガラス製法が始まりました。現在の千葉県で生まれた石塚岩三郎という武士が探究心から旅に出て、遠く長崎の地で出会ったのが「びいどろ」でした。その美しさに魅了された岩三郎は、その製法を習得し、生涯の仕事にするため故郷へと帰っていきました。しかしその道中、偶然にも土田村でびいどろの原料となる良質な硅石(けいせき)を発見したため、この地でガラス作りを始めました。岩三郎のガラス作りは脈々と受け継がれ、現在では石塚硝子株式会社（岩倉市）として、業界大手のガラス製造会社となっています。

わくわく体験館では、この吹きガラスを生かして、さまざまな製品を制作・販売したり、ガラス工芸講座を開催したりしています。

当時の製造方法で再現した金魚玉

©灰谷音屋（秋田書店）2018

FC岐阜×秋田書店×可児市 スペシャルコラボ
会場に設置する等身大「ジュニオール」と写真を撮ろう！